校長研修だより６２

# 学級経営の話②「プチ挫折」

～「再契約」の６月～

２０２２・６・８　　重枝 一郎

## ◆近頃巷で言われていること

生徒たちのクラス内での状況を見ると，悪く言えば無関心，良く？言えば，調和第一主義のようなところがあると言われる。よくあるのが，小さなグループで人間関係が完結していて，生活世界がそのグループだけで閉じているため，たとえ同じクラスであっても所属するグループが違う生徒たちの言動には全く関心を示さないということがある。いじめ問題は，人間関係が成立していないところでは起こらないので，同じグループ，つまり今所属している同質の人間関係の中で起こることが多い。今までは異質の人に対して起こることが多かったのだが，今は，同じグループの中でいじめは回っていることが多いと言われる。これは，たとえ標的にされる苦痛があっても，グループの一員であるという安堵，つまり居場所を失う恐怖を上回ることがあるからである。今教室は，交通手段を欠いた離れ小島のようにそれぞれのグループが孤立していて，クラスという大海に浮かんでいるような状態と言えるかもしれない。他のグループとは心理的距離が遠くなって，それが傍観者の多さにもつながっている。他のグループのことに口を出すのは内政干渉のような雰囲気すら漂っている。

そこで，**解決に向けて必要なことは，内在化した友人関係を外部へと開かせ，その小グループが世界のすべてではないという生活環境づくりがポイントになる。**

## ◆誰とでも組める力をつける

私は，１学期は「自分を知る」「他者を知る」を中心に「いいところ探し」の振り返りを重視していた。２学期の学級経営で意識したのは，「協力」である。担任は，「協力」を意識した学級経営にシフトする。パワーフレーズは**「誰とでも組める力をつける」**である。このような言葉やビジョンに，前向きな気持ちになる生徒もいる。生徒に「未来像」を描かせるのである。それを，定期的に点検する。スパイラル的に高まっていけばよいというスタンスで，プロセスを評価するようにする。プロセスを評価しないと，成長が硬直してしまい，次のチャレンジに向かうことができなくなる。

## ◆心地よさとダメージ（プチ挫折）の両方を体験

一日の大半は授業なので，授業と日常的な取組を往復的に行うと，相乗効果がある。学校は生徒にとっての社会である。教科内容を学ぶだけではなく，人との関わりについても学ぶ。その中で，心地よさと同時にダメージも体験させることで成長する。このダメージのことを私は**「プチ挫折」**と言う。教師のスタンスとして，結果ではなく「過程」を重視するという発想をもてば，様々な教育活動に対する考え方によい変化があると思う。少し前に「グリット」（ペンシルバニア大学心理学教授ｱﾝｼﾞｪﾗ･ﾘｰ･ﾀﾞｯｸﾜｰｽ氏提唱）という言葉が教育界でも聞かれたが，これは「やり遂げる力」という意味で使われる。人は才能や知能で成功するわけではなく，やり遂げる力で成功しているという研究結果である。そのためには，継続しようとすると思うようなマインドセットが大切である。「才能がある」とか「頭がいいから」とほめるのではなく，「がんばったな」と努力をほめるようにしなくてはならないということである。そうすることで，生徒はエラーを恐れずチャレンジするようになる。また，何かの活動をする際，「エントリーシート」を書かせ，選ばれたり，選ばれなかったりする経験をさせることも大切である。その経験は『気付き』をさせ，『考える』ことをさせ，次の『行動する』につながる。

６月５日，春日市後援の音楽イベントが本校のギール講堂で開催されました。午前中は地域・一般約 150 名，午後は春日市の中学生・保護者約 200 名が来校しました。参加者に，本校の広報チラシ（森田君作成）とこれまでの Sense of Mission（校長の巻頭言）をセットにして配布しました。配布物印刷綴じ合わせをしてくれた本校事務室の先生たち，地域国際交流センターの梶原室長，ご協力に感謝します。